

在外研修成果報告

—ドイツと北欧をめぐる—

1975年9月11日から11月10日まで、文部省在外研修生として、ヨーロッパ7カ国をめぐった。ドイツ連邦共和国で1カ月過したほかは数日間づつの短期滞在である。

ドイツ連邦共和国では、ハイデルベルク大学（ミロイチチ教授）、ハンブルク大学（フライ教授）、ケルン大学（リューニク教授）、フランクフルト考古学研究所 ローマニゲルマン委員会（シューベルト博士）で、学史、型式学、土器・石斧・石鎌、埋納遺物などについて学び、文献涉獵にはげんだ。また各地の博物館では、展示方法を学ぶ点も多かった。ケルンで開催中の、「古い世界の新しい姿」展は、1950年来の重要発見遺物を網羅すると同時に、現代ドイツ考古学の研究方法を解説し、埋蔵文化財壊滅の危機をうたえることにも意を尽しており、その姿勢に感銘をうけた。フライ教授のすすめで、ビュルツブルクの考古学協会大会におもむくと、出席者名簿に名があがっており、懇親会での委員長挨拶の中でも紹介をうけるなど、予期せぬこともあります。ヘルベルトニキューン博士ほか多数の考古学者と知りあうことができた。

ドイツ民主共和国では、ベルリンの D. D. R. 科学アカデミー（キッタ博士）、ハツレ博物館（マティアス氏）、マルチンニルター大学（シュレッテ教授）で勉強した。中石器時代土器として日本でも知られている灯心草土器^{ピンゼン＝クラーミク}が新石器時代後半にぞくすること、青銅器時代のロクロ土器なるものが、じつは粘土帯積み上げ法によっていることを確め、14C年代ほか多くの問題について知識・意見を交換した。

オーストリアでは、ウィーン大学（ピチオニ教授）、自然史博物館（メリヒャー博士）をたずね、ハルシュタット遺跡の岩塩坑の壁をなめ、ザルツブルクのモーツアルト生家を訪れて、しばし感慨にふけった。

デンマークでは、1970年に来所した B. クリストセン博士のお世話になり、国立博物館では、展示方法を記録したほか、トムセンの『北欧古代学入門』をめぐる疑問を解決し、彼の墓に詣でた。またライレの実験考古学農場を訪問した。スエーデンでは、遠東博物館（ヴィルギン博士）の展示方法を記録し、モンテリウスの初期の文献を受贈し、墓参した。オランダでは、グローニングンの生物考古学研究所（ウォーターボルク教授）を訪問した。イギリスでは、新石器時代を定義した原典、ラボックの『先史時代』の初版をみるとことができた。また学史にくわしいダニエル教授（ケンブリッジ大学）にトムセン英訳に訳者の付加が多いことを報告した。

今回の渡欧は、ハンブルクで高価なコーラを飲まされるなど苦い経験もあったが、ヨーロッパの風土・人間に直接せっすることができた喜びは、学問的収穫にも増して大きい。

なお、西ベルリンのドイツ考古学研究所、ハイデルベルク大学、ケルン大学、マインツのローマニゲルマン中央博物館、東ベルリンの D. D. R. 科学アカデミー、マルチンニルター大学、コペンハーゲン大学、ケンブリッジ大学では、持参したスライドによって日本先史時代概説、飛鳥～平城宮概説を行い、欧文による紹介の必要性をうながされることもしばしばであった。

（佐原 真）